

「学力向上への新たなチャレンジ」

～学力向上に向けた見附市の取組～みつけレインボーの実践より～

新潟県教育委員会

はじめに

新潟県における過去3回の全国学力・学習状況調査結果を見ると、平均正答率では、全国平均と比較して、小・中学校ともほぼ同程度である。このことから、新潟県の児童生徒の学力は、概ね全国水準を確保できているものと受け止めている。

しかし、学習内容の定着状況や学習意欲の面において、地域間、学校間の差が拡大してきていることから、学力向上アクションプランを活用し、積極的に事業推進を図ることとした。

I. 都道府県・指定都市教育委員会における取組

1. 事業内容について

(1) 事業概要

新潟県においては、全国学力・学習状況調査の結果から、次の2点の課題が見えた。

学力については、概ね全国水準は確保しているものの、「知識」に関する問題と比較して、「活用」に関する問題の定着が不十分であった。また、学習状況については、授業の内容が「よく分かる、どちらかというよく分かる」の回答は、いずれも全国を上回っているが、教科(国語、算数・数学)の学習が「好き、どちらかという好き」の回答が、全国値を下回っていることから、学習への興味・関心を高めることが課題である。

見附市においては、全国学力・学習状況調査において、小学校6年生と中学校3年生ともに、国の正答率を上回っている。

しかし、国語、算数・数学ともに、学力の層が、中央値をはさんで2極化している傾向が見えた。特に、算数・数学においてはその傾向が顕著である。小学校と中学校とを比較すると、

主として知識を問うA問題より、主として活用を問うB問題の方がより2極化が大きくなる傾向が見られた。

また、児童質問紙調査においては、教科への関心を示す値が全国平均を下回っている学校が複数ある。これらのことから、見附市は、学力の層が2極化していること、教科への関心が低いことの課題が明らかである。

そこで、新潟県教育委員会は、学力及び学習意欲の向上を県の最重要課題であると捉え、その課題解決のために、本事業を見附市に委託し、その成果を他地域へ普及することとした。

(2) 実施体制

新潟県では、次のような体制を組み、取組を推進した。

① アクションプラン推進協議会の開催

新潟県教育委員会、見附市教育委員会、アクションプラン推進校(小学校8校、中学校4校)及び大学教員等学識経験者で構成するアクションプラン推進協議会を年2回開催する。

② 全国学力・学習状況調査を活用し、学力向上を図るための資料を提供する。

(ア) 全国学力・学習状況調査結果について、統計的な見地から新潟県及び見附市について特徴的な傾向等を明らかにする。

(イ) 県内の各小中学校が各教科の指導内容ごとに全国との比較の上で、自校の実態を把握し、授業改善できるように分析シート(学力)を作成する。

(ウ) 県内の各小中学校が学習状況の各項目ごとに全国との比較の上で、自校の実態を把握し、授業改善できるように分析シート(質問紙)を作成する。

(エ) 県内の各小中学校の指導の成果を検証するため、全国学力・学習状況調査問題を、履修する学年ごとに再構成したものを作成する。

- ③ 本事業の取組を県内の全指導主事を対象にした研修会（全県指導主事会議）及び県内の小中学校の教員を対象にした研修会（新潟県学力向上フォーラム）で発表することで、成果の普及を図る。

（３）研究成果

全ての学校が分析シートを活用して、自校の実態分析に取り組んだ。そして、全ての学校が、県教育委員会が作成した調査問題を活用して、自校の定着状況を把握し、成果を検証した。

2. 普及啓発と今後の取組について

（１）成果の普及啓発に関する取組

次のような取組を実施し、普及啓発に努める。

- ① リーフレット「分かる授業づくり」の発行及びHP掲載
全国学力・学習状況調査の分析結果に基づき、教育委員会や各学校の取組のポイントを示したリーフレットを作成し、県内の全市町村及び各小・中学校に配付するとともに、県教育委員会のホームページに掲載した。
- ② 新学習指導要領に係る研修機会の設定
（ア）有識者による講演会
県内全小中学校から教育課程の実施における中核的な役割を果たす教務主任等を対象に、各校1名以上の悉皆研修を実施した。
（イ）地域の中核となる代表教員を対象に、教育課程研究員の実践事例の提案を基にした新教育課程研究集会を開催した。
- ③ 全国学力・学習状況調査結果や調査問題の積極的な活用の促進
各校で、全国や県と比較しながら自校の結果を分析できるような一覧表や、過去の調査問題を該当学年ごとに編集し直した問題を各小・中学校に配付し、調査結果及び調査問題の積極的な活用の推進を図った。
- ④ 学力向上アクションプラン推進事業の実施
県では、地域内の学校が共通に有しており、地域全体として対応が求められている課題の解決が必要と考え、先導的に地域としての取組を実施している見附市に事業を委託するとともに、大学の教員等の有識者を含むアクションプラン推進協議会を組織し、体制整備や事業総括を行った。

（２）来年度以降の取組

新潟県教育委員会は、県内の全指導主事を対象とした「全県指導主事会議」での発表及び県内の小中学校の教員を対象とした研修会「新潟県学力向上フォーラム」での発表を行う。

- ① 新潟県全県指導主事会議
（ア）期日：平成22年4月21日（水）
（イ）場所：新潟県立教育センター
- ② 新潟県学力向上フォーラム
（ア）期日：平成22年6月10日、11日、17日、23日
（イ）場所：新潟県内4会場

新潟県では、平成22年度から学力向上推進システム活用事業を新規に実施し、児童生徒一人ひとりの学力や学習状況の確実な把握の基にした、学力向上の取組を強化していく予定である。

（※学力向上推進システム活用事業…各学校や市町村が各学年の学習内容レベルで定着状況の診断ができるようにするため、インターネットを利用した問題配信システムを構築し、各問毎の平均正答率のデータを市町村及び各学校に提供するもの。）

対象教科…小学校3学年から6学年の「国語」「算数」
中学校1学年から3学年の「国語」「数学」「英語」

試行を経て、年間10回程度配信の予定。

今後、各市町村及び各学校に対して、本システムの有効活用を促していくが、見附市には、本システムの活用により、地域の課題解決に取り組む先頭的な事例となることを期待している。

現時点では、各学校の学力向上推進システムによる学力診断調査の活用は任意であるが、将来的には、全ての学校が活用することを目指している。

Ⅱ. アクションプラン推進校における取組事例

取組事例

「学力向上に向けた7つの取組～みつけレインボー～」

見附市内小中12か校

(1) 市内12か校の学力状況について

平成21年度4月の全国学力・学習状況調査では、見附市は小学6年生・中学3年生の全ての教科で、全国平均正答率を上回った。しかし、詳しく分析していくと、以下の2点の課題が見えてきた。

- ・学力の層に2極化の傾向があること
- ・学習への関心意欲が高まっていないこと。

これら2つの課題を解決し、学力の向上を一層図るために、市内の小中全12か校が協働して取組を推進していくことにした。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

見附市の課題を解決し、学力を向上していくために、子どもの分かる、できる喜びを保障し、子ども自身の学習への意欲を高めていきたいと考えた。

そのために、「みつけレインボー」として7つの柱を設定し、取り組んだ。



取組の効果については、市内小中学校から抽出した児童生徒100名の変容をもとに、学力の向上や関心意欲の高まりに有効な手だてを探ることとした。

① 「みつけレインボー」の取組

(ア) 授業改善

授業改善を図るには、教員一人一人の指導力向上が欠かせない。そこで、以下の3点の取組を実施した。

○ マンツーマン指導の実施

教員OBから、板書の仕方や机間巡視のやり方、ノート指導などについて、1人が年間に2回の指導を受ける場を設けた。



○ 大学からの専門的な指導

学力向上に向けた各校の課題を明らかにして、新潟大学教育学部の先生方からより専門的な指導をいただく機会を設けた。



○ 教師の10か条



さらに、市内の教職員から学力向上に結びついた取組を集め、「教師の10か条」としてまとめた。成功事例を市内全体で共有化することで、授業改善を図っていった。

(イ) 家庭学習の充実

2極化の解消や学習意欲の向上には、家庭学習の充実が臨まれる。

そこで、家庭学習の方法・内容を児童生徒や保護者に紹介する家庭学習ガイドブックを作成した。

各学年の発達段階に応じた家庭学習の内容等を具体的に示すことで家庭学習の習慣化と充実を図ることとした。



(ウ) よりよい生活習慣づくり

全国学力・学習状況調査の結果から、テレビやゲームの時間等、生活習慣の改善についても市内全体で取り組む必要があると考えた。



そこで、「見附の子どもの生活の約束10カ条」としてガイドブックを作成した。

ガイドブックを見附市内の小・中学生の家庭に配布し、家庭と学校が連携しながら、よりよい生活習慣づくりに取り組んでいくこととした。

(エ) 読書活動の推進

見附市ではこれまで「家読」の呼びかけ等、読書活動の推進に市全体で取り組んできた。



今回はさらに読書のための選書を行い「見附の子どもの本小学生向けリスト100」を作成した。各学校では100冊コーナーの設置、カードの作成等、子どもたちが本に一層親しむように工夫して取組を行った。

(オ) 個に即したきめ細やかな指導

一人一人の子どもにつまづきに対応したきめ細やかな指導ができるよう、学習ボランティアを活用した学習支援を実施した。



(カ) 学校・家庭・地域との連携

よりよい生活習慣づくりのためのノーテレビデーでは、テレビを見ないだけでなく、家族との対話や読書への時間の活用を呼びかけている。

A小学校は、ノーテレビデーの実施日を中学校のテスト期間に合わせると同時に、家読カードの配布を合わせて行った。



家庭読書の様子はカードを活用して、学校にもお知らせいただくことで、学校と家庭とが連携して取組を進められるようにした。

(キ) 大学との連携

児童生徒の興味関心に基づき、普段の学びをより広げていくことができるよう、新潟大学教育学部の先生方の「出前授業」を実施することにした。



(3) 成果について

(ア) 数値的な評価から

○NRT偏差値

小学校国語

H20 54.8 → H21 54.9

小学校算数

H20 55.5 → H21 56.1

○学習状況に関するアンケート

「授業に一生懸命取り組んでいる」

H21.7 92% → H22.3 95%

「授業がよく分かる」

小学校国語

H20 95% → H21 95%

小学校算数

H20 91% → H21 92%

中学校国語

H20 85% → H21 89%

中学校数学

H20 71% → H21 79%

「1週間の家庭学習をほぼ毎日している」

H21.7 52% → H21 58%

これまでも高かったNRTの数値が、国語、算数共にさらに上がったのは、本取組の成果であると考えます。

また、「授業に一生懸命取り組んでいる」児童生徒の割合が増えていることから、学習への関心意欲も高まっていると評価します。

「授業がよく分かる」割合が、特に中学生において増えているのは、中位層と下位層の「授業が分かる」割合が増えてきたことによるものと思われる。したがって、学力の2極化についても、改善傾向が見られる。

(イ) タイプ別に見た有効な手だて

市内小中学校から抽出した100名を、「学力高、関心意欲高」、「学力高、関心意欲低」、「学力低、関心意欲高」、「学力低、関心意欲低」の4タイプに分け、学力の向上や関心意欲の高まりに有効な手だてを考えた。



○「学力高、関心意欲高」タイプについて

「**発展的な課題**」がこのタイプの児童生徒をさらに伸ばしたという事例が複数見られた。具体的には、「新聞記事を生かして読む力を伸ばす」、「写真からイメージして物語を作る」、「大学生の個別指導を生かして発展的な課題に挑戦する」、「**発展的な課題を家庭学習にする**」等である。力は十分発揮しているタイプだが、知的好奇心や挑戦心等を刺激する働きかけが大切であると言えそうである。他には、「グループ学習やペア学習で、仲間に説明する、仲間の考えとの違いに目を向ける」等により、話す力や書く力を伸ばした例も見られた。

○「学力高、関心意欲低」タイプについて

「**家庭学習の工夫**」がこのタイプの児童生徒をさらに伸ばしたという事例が複数見られた。具体的には、「課題の選択制」、「ミニテストによる家庭学習の成果の数値化」、「家庭学習カードを生かした教師の指導」等である。テスト等の数値は高いタイプであるが、こつこつと自分なりに学習していくように指導することがさらに伸ばしていくために大切であると言えそうである。他には、大学の先生の出前授業により、考えることのおもしろさに気づき、意欲的な姿が見られたという例も複数見られた。

○「学力低、関心意欲高」タイプについて

「**個別指導**」がこのタイプの児童生徒をさらに伸ばしたという事例が複数見られた。具体的には、「1日1問の個別指導」、「授業の終末での個別指導」、「家庭と連携して、複数の目で見守る」等である。授業中の発言は多いタイプであるが、確かな理解に結び付けていくためには、理解状況を確認し、個別に指導していくことが大切であると言えそうである。他には、「学び方を指導する」、「数値に表れない姿を成果として認める」等も有効であった。

○「学力低、関心意欲低」タイプについて

「個別指導をする」、「スモールステップのワークシートを行う」、「先取り学習を行う」、「できていることをほめる」、「体験的な学習を位置付ける」等、このタイプの児童生徒を伸ばしたという事例は、多様であり、一人一人の状況をよく理解し、一人一人にあった指導が他のタイプに比べて一層大切であることが言えそうである。また、一つでなく複数を組み合わせ

せていくことが大切であることも見えてきた。

なお 100 人の児童生徒一人一人の変容については、「学力向上への新たなチャレンジ 4 つの類型・100 事例」として冊子にまとめた。



冊子をもとに、取組の成果を市内全体で共有し、学力向上に向けた授業改善等の取組に活用していきたい。

(ウ) まとめ

「みつけレインボー」として7つの柱を設定し、100名の児童生徒をタイプ別に類型化することで、それぞれのタイプに有効な働きかけを見出すことがで

きた。

取組の評価については、22年度の全国学力・学習状況調査をもとに行う必要があるが、現時点ではNRTの数値(国・算6年生)、学習状況アンケート、抽出児の変容等からこれまで述べてきたように、次のような成果が見られた。

- ・NRTの数値は、国語、算数共に上がり、学力の向上が数値として表れた。
- ・中位層、低位層の「授業が分かる」割合が増え、学力の2極化傾向に改善が見られた。
- ・学習に対する関心意欲が、小学校、中学校共に高まった。

(4) 来年度以降の課題について

みつけレインボーとして進めてきた「授業改善」、「家庭学習の充実」、「読書活動の推進」、「大学との連携」等について、一層充実していくことが今後の課題である。具体的には、次の3点である。

- ・学力向上に向けた全校体制での取組を一層充実していくこと。
- ・家庭・大学との連携について、今年度の成果を踏まえた具体的な方策を立案していくこと。
- ・「学力の向上に向けてこれだけは大切にしたい教師の10か条」を活用し、教師の指導力向上をさらに図っていくこと。